WING

International Friendship ”WING”
代表　和田　幸夫
TEL: ０９０－３４９７－２１１０
発行人　小原　千種

A　は じ め に

３月にフランス・スイス海外短期留学報告で関戸さんが“リヨンと日本の絹の結びつき”について報告してくれたことを思い出し、連休前に富岡製糸場を訪問してきた。明治政府が殖産興業を推進する日本初の官営模範工場として富岡製糸場を建設することに決し、フランス人技術者、ポール･ブリュナ氏等を招きフランス製の製糸器機を取り入れて、明治５年操業を開始した。時の政府とフランス留学の経験ある渋沢栄一氏の決断力と行動力に追うところ大であるが、忘れてならないのはお国の近代化のために働いた女工たちの力である。売店で買った「富岡日記」(ちくま文庫)に出会えたことはとてもラッキーだった。著者和田映さんは松代藩士の娘として生まれ 15 歳で自ら志願して工女に。工場や工女たちの様子を克明に書いており、当時の世相がわかる面白い本である。
実はこの本が題名「赤い襷（たすき）～富岡製糸場」で映画化され、2017 年 6 月上海国際映画祭に出展、10 月から劇場公開するとのこと。関戸さんの発表から明治初期の日本の近代化を学ぶ良い機会を得たことに感謝したい。　　和田幸夫　記）

B　今月の国際理解講座

日時　２０１７年５月１８日（第３木曜日）１８：３０～２０：３０　国際交流会館１階ホール
演題　異文化コミュニケーション
内容　オーストラリアの歴史、文化、諸事情について
講師　マキンタヤ　スティーブン　（Stephen P. Mcintyre）　氏　　、
一橋大学・社会学研究科修士２年に在籍　　通称 オーサカラリアンのブンさん。
スティーブンさんは、両親が仕事の関係で来日していた大阪で生まれ、１３歳まで大阪暮らし。日本の小学校に通っていたお蔭で日本の文化、日本語や、流暢な関西弁が自然に身に着くようになったとの事。その後オーストラリアに移住。
それゆえ彼のアイデンティティは「オーサカラリアン人」だそうです。

次回の国際理解講座

６月の国際理解講座は、６月４日（(日)）に課外講座～クリスと歩く国立ピクニック～を実施しますのでお休みです。

７月の国際理解講座

日時　７月２０日（第３木曜日）１８：３０～２０：３０　国際交流会館１階ホール
講座内容および講師は未定にて決まり次第、ご連絡致します。

C　報告事項

４月の異文化コミュニケーションは、「リトアニア」についてクレイヴァ・アンドリュウス（:Andrius Kleiva ）氏にお話しして頂きました。その感想文を杉本敬太郎さんから寄稿して頂いています。

リトアニアと言えば、第二次世界大戦中に杉原千畝さんの「命のビザ」の舞台となった国ということぐらいしか思いつかなかったが、アンドリュウスさんの講演の１週間ほど前、テレビ東京の『未来世紀ジパング』という番組の中でも、ちょうど紹介されていた。
その番組中では「世界を分断する壁」というテーマの一例として、リトアニアがロシアとの国境に壁をつくるとか、７年ぶりに徴兵制度が復活したということが取り上げられていて、緊張状態を増長しかねない強硬手段に出たなと、その時は感じていた。
けれども、アンドリュウスさんの話を聞いて、テレビで取り上げられた内容は結果でしかなく、そこに至るには苦渋の決断があることを知った。それはリトアニアが、日本と同じように資源が少なく、日本以上に小さく、日本以上に大国に囲まれて、そして４回も占領された国。そんな国だからこそ、独立国を維持しつづけるために、こういった政策に行きついたということが分かったから。他国の文化を取り入れつつも自国の文化を守り、自然との共存や手仕事を大切にしている国。距離以上に日本に近い国かもしれないと感じた。

（広報担当　杉本啓太郎　記）

D　これからの行事予定

国立の名所旧跡の散策コースを歩きながら、くにたちの子供達や地元の人達との交流をしませんか。昼食後、お楽しみパフォーマンス、人形劇、平面プロレス、大道書道を披露してくれます。

★日 時 ：２０１７年６月４日(日)９時３０分～１５時
★集合時間＆集合場所:９時３０分　谷保天満宮の階段下鳥居前（小雨決行）
★コース:谷保天満宮～城山～古民家～郷土文化館～滝乃川学園～遠藤宅庭にて昼食及びパフォーマンス
★対 象:小・中学生と一橋大学留学生(小学生は４年生以上)
★募集人員：先着２０名
★参加費:500 円、留学生はご招待のため無料　昼食・飲み物は各自で用意。
★コーデイネーター：クリストファー・ロビンさん
★主催：くにたち国際友好会 WING　★問い合わせ　和田　０９０－３４９７－２１１０
散策コースの詳細は下記を参照してください。
http://kunimachi.jp/course/yaho-yagawa/

Ｅ こ ぼ れ 話

～～兼松講堂の寄贈者・兼松房次郎氏とオーストラリアとの繋がり～～

先日、下打合せでスティーブン氏にお会いした時、両国の繋がりとして貿易の話が出ました。その時ふと頭をよぎったのは「日豪貿易のパイオニア」と言われている兼松房次郎氏の事でした。今や国立市のシンボルである「兼松講堂」は、房次郎氏の１７回忌の時、遺訓による５０万円の寄付で、昭和２年に建築家・伊藤忠太氏の設計により建造されました。その一橋大学にゆかりのある兼松房次郎氏とオーストラリアの絆について述べてみたいと思います。

＊　＊　＊

兼松房次郎氏

弘化２年（１８４５年）生まれの兼松房次郎氏は、江戸時代末期から大正初期にかけて大阪出身の日本の実業家で兼松商店（現・兼松株式会社）の創業者。幼少の頃、父親が行方不明になり１２歳で母親を養うため、あちこちの商店に住み込みで「丁稚奉公」するも、どこも続かず、数々の辛酸をなめた奉公の後、親戚の要請で兼松家の養子になり、商業で身を立てる決心をする。

大阪、横浜などで綿糸、雑貨の商業に従事し、誠実かつ積極的な努力が実を結び、その後、大会社の役職に次々と請われて就くも、すべての役職を譲り、神戸に「豪州貿易兼松房次郎店」を創設。

人生５０年と言われた時代に、４４歳で豪州との貿易に大きな一歩を踏み出した房次郎氏、彼の生き方は日本の未来を見据えた挑戦とは言え、経営的には苦労の連続でもあった。

羊毛商として日豪貿易に尽くすこと２５年、人呼んで「兼松豪州翁」。元丁稚の「房公」は常日ごろ「儲けはカスである。余ったら公共のために寄付すべきである」と言っていた由。

たぶんオーストラリア人(元来はイギリス人)から Philanthropy の思想を教わったのだろう。この兼松房次郎の意志を後継者が引継ぎ、資本金の何分の一かに当たる巨額を、故人の７回忌には神戸大学に「兼松研究所」、１３回忌には一橋大学に「兼松記念講堂」、１７回忌にはシドニー病院「兼松記念病理学研究所」などを創業者の遺訓を偲んで寄付したのだった。シドニー病院については、明治時代に日本から渡り、行き倒れになった人達に対するオーストラリア人の博愛精神への謝恩の気持ちが含まれていたとの事、この研究所からノーベル賞受賞者を二人輩出している。

偉業を成しえた兼松房次郎氏は、大正２年（１９１３年）神戸で病没、６８年の生涯を終えた。

＊　＊　＊

あ と が き

兼松講堂

関東大震災が大正１２年（１９２３年）に勃発、当時神田にあった商科大学（一橋大学）の建物はほぼ壊滅状態になりその後、現・国立市に移転を決意します。当時、講堂の建設費用は政府から１３万円と提示されていましたが、遺訓の５０万円により政府の軋轢を受けることなく、いち早く昭和２年に建造されたそうです。（国立への大学移転は昭和２年～５年）

因みにこの５０万円の寄付の為に社員はボーナスを返上したとか、これは真実のようです。　　（小原千種　記）